



「創造的退行」と「ブロッター概念間のバランス」 という観点からみた芸術家のロールシャッハ反応～ グラフィック・ロールシャッハ法（デジタル版）を用いて

清原，舞子

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8535号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482283>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博 士 論 文

「創造的退行」と「プロットー概念間のバランス」
という観点からみた芸術家のロールシャッハ反応
～グラフィック・ロールシャッハ法（デジタル版）を
用いて

2023年1月

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

177D801D 清原 舞子

論文内容の要約

氏 名 _____ 清原 舞子 _____
専 攻 _____ 人間発達 _____
指導教員氏名 _____ 伊藤 俊樹 准教授 _____

論文題目

「創造的退行」と「プロットー概念間のバランス」という観点からみた芸術家のロールシャッハ反応～グラフィック・ロールシャッハ法（デジタル版）を用いて

論文要約

本論は、芸術家などが創造活動を行うときの自我のありようとしてSchafer,Rが提唱した＜創造的退行(creative regression)＞をキー概念に据えて、芸術家の精神機能についてあきらかにするものである。芸術家の創造的退行のありようを知るためには、言語反応における一次過程への退行の様相と二次過程の様相を調べる必要があり、一次過程を測る方法として、ロールシャッハ法を用いた研究が多くなされてきた。

第1章では、芸術家の創造的退行の基礎概念や先行研究、特に、ロールシャッハ法を用いた芸術家研究を外観し、芸術家の創造的退行のありようを探る方法を検討した。その結果、先行研究を踏まえて、以下の手法について整理した。①Holt,R.の一次過程スコアリングシステム(PRIPRO)を用いて一次過程的思考反応(PPR)を算出する方法、②グラフィック・ロールシャッハ法デジタル版(GRD)の手法と、得られた描画反応を＜プロットー概念間のバランス＞のとり方から、＜プロット優位＞＜バランス＞＜概念優位＞の3水準に評定する方法、③ロールシャッハ法のスコアリング、および、PPRやGRDで得られたデータを質的分析ソフト(MAXQDA)で一括管理する方法である。Holt,R.のPRIPROは、ロールシャッハ法を用いて一次過程的思考を測る指標として、信頼性と妥当性を備えた測定尺度とされており、芸術家を対象とした研究が多くなされてきた。また、GRDは、自身でみた反応を描画してもらう特殊な手法であるが、通常の(言語的)ロールシャッハ法では明確にできない反応過程(インクプロットを認知し、記憶している概念やイメージを想起して、インクプロットと統合する過程)を観察可能にする方法である。GRDを施行することによって、ロールシャッハ法では判別が困難とされてきた形態水準を明確にし、知覚的な問題をより詳しく評価することができる。それにより、一次過程的反応にスコアされるような複雑な言語表現を示す芸術家の言語反応が、創造的なものであるのか、あるいは病的なものであるのかを判断する手立てとなることが考えられる。さらに、ロールシャッハ法は、多くの研究者によってスコアリングシステムが開発されているが、いずれもデータが膨大となり、研究に際して対象の被検者が多くなる場合は、その整理に苦慮する。特に、Holt,R.のPRIPROは、40以上の下位項目があるため、スコアリングし、分析するために大掛かりな作業が必要である。さらにまた、本研究では、GRDで得られた描画反応を比較検討するため、データが膨大となった。そこでMAXQDAを導入したことで、データのスコアリングから分析まで1つのファイルで処理でき、ペーパーレス化できたことはデータ処理上、画期的な成果と

いえる。

第2章では、芸術家の創造的退行のありようを探るため、第1章にてとり上げた手法を用いて、その特徴をあきらかにすることを目的とした。対象は、芸術家の中でも音楽、絵画、身体表現と表現手法の違う3群(26名、平均年齢40.4歳、 $SD=8.4$)であり、方法として、GRDを施行し、PPRと描画反応のデータを基に量的分析を行った。その結果、芸術家群のPPRの特徴として、PPRの総反応数が全体の平均値で5.8($SD=5.1$)であり、ノーマル群と比較して、PPRの総反応数が多くバラつきがみられた(range : 0-16)。さらに、PPRの各反応において最も多くの芸術家が反応を示したのは、自閉的明細化(AuEl1)と自己関係づけ(S-R1)であった。各反応を詳しく検討した結果、本研究の芸術家のPPRが必ずしも創造的適応的とは限らず、芸術家個人の心理的問題や病理を示している可能性も示唆された。また、GRDでは<概念優位>が多く<バランス>の反応もみられたが、PPRに対するGRDをみると<概念優位>の傾向がより高まった。これらのことから、芸術家の創造的退行のありようを研究するためには、①Holt,R.のPRIPROによって測られる一次過程への退行と、②<コントロールと防衛>のスコアによるコントロールの検討、③GRDによるバランスという新たな指標の3つの視点からより詳細な検討が可能なのことがわかった。さらに、PPRとGRDについて継列的に分析を行った結果、常にPPRが生じるわけではなく、プロットと概念のバランスのとり方も図版に応じて変化することがわかった。

第3章では、GRDの描画反応における<プロットー概念間のバランス>から、<バランス><プロット優位><概念優位>の3水準の反応を多く示した3事例を抽出し、GRDにおけるバランスのとり方から、芸術家のロールシャッハ反応の特徴を検討し、さらに、PPRとの関係から芸術家の創造的退行のありようを質的に分析した。その結果、<バランス>を多く示した事例Aは、情緒的刺激を受けると抽象的概念(Abst)が生じやすく、コントロールが低下するが、そのような一次過程的な思考様式においても、創造的思考過程を巡らせている様子がみられた。また、Mを伴う人間反応を示すことで、事例Aの創造性はより活性化し、退行的だが現実在即した客観的な視点を持ち、<バランス>を保つような創造的能力のありようがみられた。また、このありようからは、創造的退行が生じていることが考えられ、この能力を基礎にして、事例Aは、多くの表現者と共に身体を用いて、演出家としても、作品を創作することが可能になっていると考えられた。

一方、<プロット優位>を多く示した事例Bは、PPRがみられたことから一次過程への退行がみられたが、その言語表現が飛躍的な発想の展開であるため、本人の中では了解がとれているが、他者が共感しづらいという意味において自閉的な思考過程を示した。さらに、事例Bの反応にみられた全体反応(W)への強いこだわりや、<プロット優位>すなわち、描画反応におけるプロットに固執した反応へのこだわりは、Mの欠如すなわち、内的想像性の欠如も関連していることが推測された。その点からは、事例Bの神経発達上の特性が伺われた。これらの過程の中には、<遊びの要素>が感じられず、創造的退行が生じているとは言い難い。また、自身の身体を鍛え抜き、その裸体を観客に晒すという事例Bの表現スタイルや、実生活において農業や狩猟をしながら自給自足をするという生活のあり方は、超現実主義極端なプロット優位)とも言える事例Bのありようとつながり、事例Bの創造活動と表裏を成すものであると考えられる。

また、<概念優位>を多く示した事例Cは、言語反応においてもPPRを頻出し、GRDの描画反応においてもプロットをほとんど無視した描画表現を示しており、独創的な世界観の中で、自由に楽しむような様相がみられた。さらに、自身が反応を楽しむだけでなく、検査者が「どの

ようにみているか」を意識している様子がみられるなど、一次過程への退行を示しながらも、反応そのものに巻き込まれることのない自我の強さがみられた。このような様相からは、みるものを意識する事例Cのエンターテナーとしての一面が垣間みられた。また、ほとんどの反応において＜概念優位＞の描画反応を示した事例Cであったが、最後の反応では＜バランス＞のとれた描画反応を示し、コントロールする力が全くない訳ではないことが示された。さらにまた、事例Cが反応それ自体を楽しんでいる様子からは、＜遊びの要素＞がみられ創造的退行が生じていると考えられた。

これらの事例を通して、描画反応の創造的過程においてGRDのバランスのとり方と＜遊びの要素＞(Abraham,1996)との関係が見出された。

第4章では、一芸術家における創造的退行のありようの変容をPPRやGRDを用いて探り、さらに創造物である作品の変容から、芸術家の創作心理プロセスをあきらかにした。対象として、芸術家・亀井三千代氏にご協力頂き、5年間の間隔をあけてGRDを施行し、創造的退行のありようの変容と、作品の変容を関連付けて検討した。その結果、ロールシャッハ法においては、1回目より、5年後に施行した2回目の方が、PPRが顕著に増加し、より退行的態度がみられた。また、一般スコアにおいては生産性の高まりや(R↑)、一般的ではない細部への反応の増加がみられ(Dd%↑)、このことが、PPRの増大と関連していると考えられた。また、PPRの増大によって、言語反応では了解が困難な反応が増えたことが形態水準の低下につながっている(R+%↓)。しかし、全体的にノーマル群から大きく崩れるようなスコアはみられず、描画反応においては、＜バランス＞のとれた描画反応をより多く示した。これらのことから、亀井氏は、言語反応として退行的な態度や反応を多く示しても、精神機能としての低下はみられず、自我が保たれた状態であることが示され、より深い創造的退行のありようがみられたといえる。

また、亀井氏の作品は、日本画の技法を用いて人間の臓器や花の細胞を連想させる「解剖図的描画」と春画の官能的なモチーフを融合させ、観るものに強烈な印象を与えるような作風が特徴的である。しかし、亀井氏は2回目にGRDを実施した年の個展で「人拓」という新たな手法を用いた作品を発表した。「人拓」とは、裸になった自分の身体に墨を塗り、和紙の上に版画のように身体を押し付けて転写させる手法である。これまで、日本画の繊細な筆先を用いて描いてきた亀井氏にとって、それは大きな試みであり、自らの裸体をうつしとして作品として発表するという創造過程が、ある種の＜通過儀礼(initiation)＞(Jung,C.G.,1968)として機能し、作家、アーティストとして覚悟がより深まった可能性が考えられる。しかしまた、「人拓」という一見、プリミティブで退行的な手法をとり入れたようではあるが、その創造プロセスにおいて、衝動的に身体を転写している訳ではなく、緻密にイメージトレーニングしてコントロールした上で創作されていた。この創造プロセスと、さらに同時期に施行したGRDにおいて見られた非現実的なPPRの増大と、現実とのバランスをとる＜バランス＞の増大という両極のありようこそが、亀井氏の創造的退行の深まりを示すと考えられるだろう。これらのことから、作品との関連において芸術家の創作心理プロセスの一端が明らかになったといえる。

以上のように、本論では、芸術家の創造的退行のありようをGRDにおける描画反応とPPRという観点からあきらかにし、芸術家の創作心理プロセスとの関連とともに検討してきた。芸術家にGRDを施行し、描画反応を検討した先行研究は海外を含めて本研究が初めてである。GRDを軸に芸術家のロールシャッハ反応を詳細に検討できたことは、本研究のオリジナリティであり、芸術家研究を新たな側面から一步前進させることができた貴重な研究と言って良いだろう。